MINAMI KYUSYU NO JOKAKU
南九州の城郭
第21号
南九州城郭談話会報
平成15（2003）年12月25日発行

中世山城「志布志城」の概略

大窪祥晃

1　はじめに

鹿児島県曽於郡志布志町の前川河口付近，シラス台地の先端部に，内城・松尾城・高城・新城の４つの中世山城が存在している。この４城を総称して「志布志城」と言う。

図１　志布志城　位置図

志布志城の正確な築城年は不明だが，南北朝期に松尾城と内城が築かれたと考えられ，その後，高城と新城が築かれたとされている。また，長い戦乱の年月を経過するうちに，規模の拡張が行われている。

志布志町教育委員会では，国・県の補助事業を導入し，町内遺跡確認調査等事業として平成15年度～16年度の計画で志布志城跡の確認調査を実施している。ここでは志布志城の歴史的背景と内城跡の現状，各城の調査の概要について触れることとしたい。

2　志布志城の歴史的背景

志布志は、万寿３年(1026)平季基によって開かれた大荘園島津荘の水門として，物流の

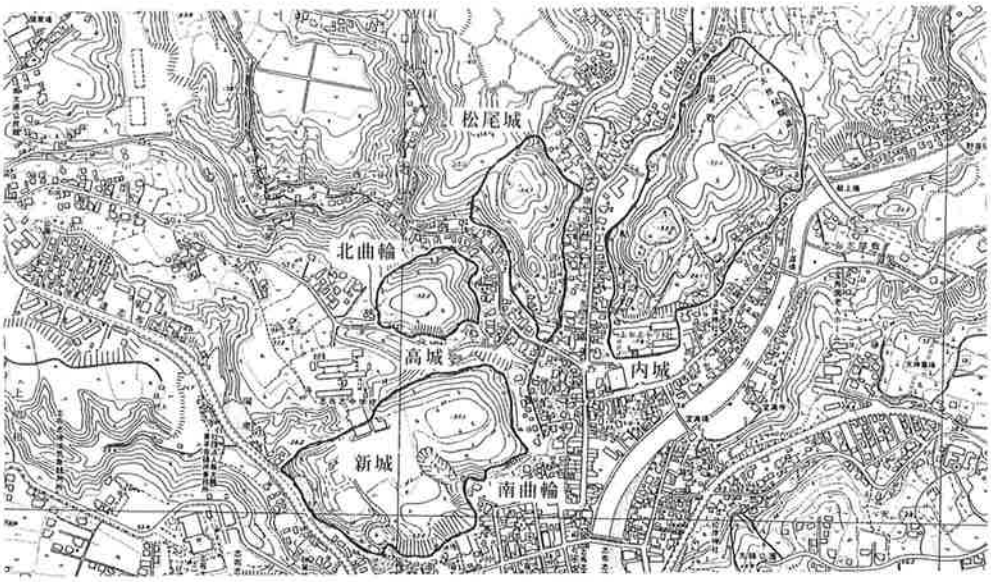


図２　志布志城　配置図

日向国志布志内城縄張図

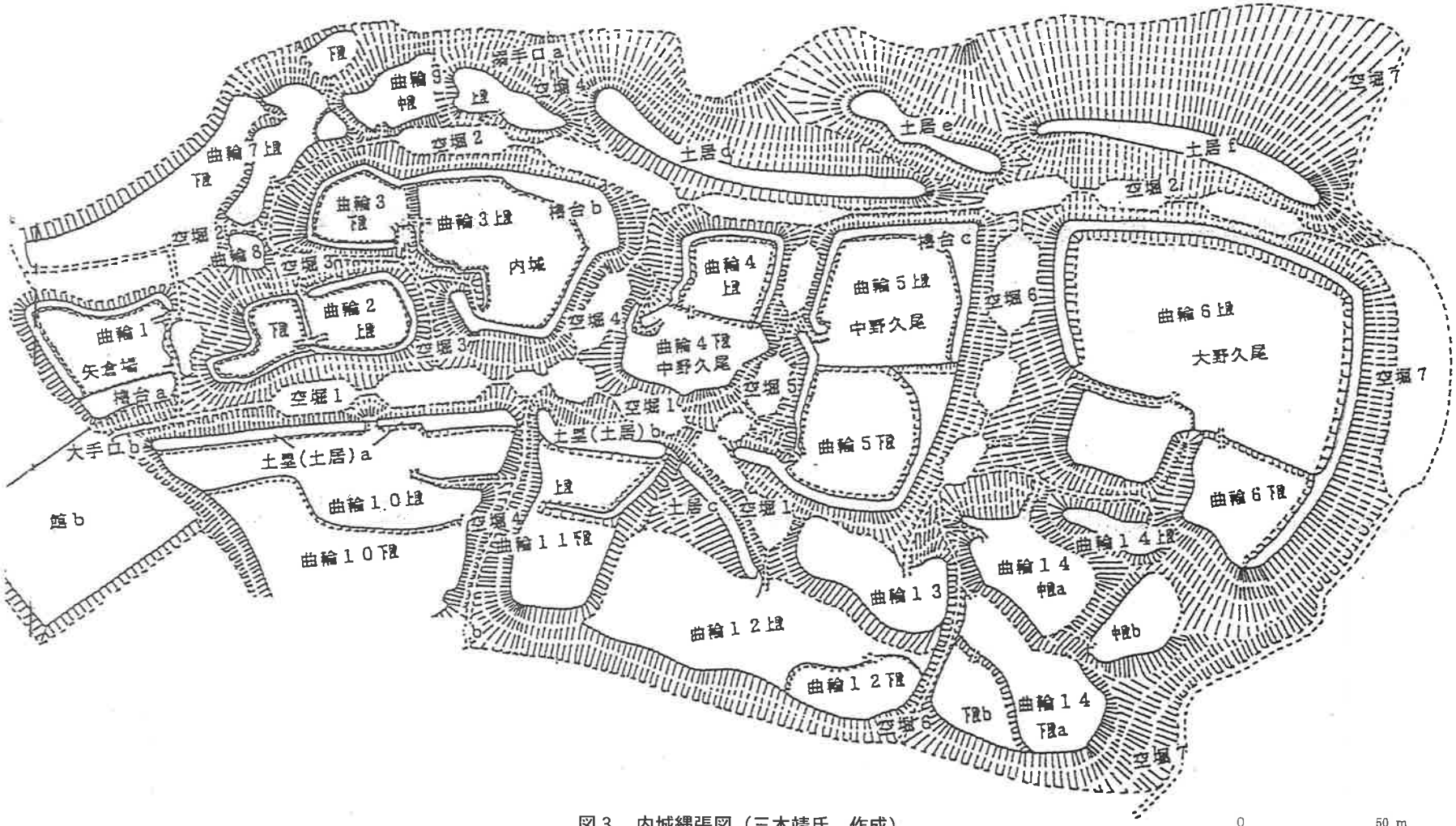


図3　内城縄張図（三木靖氏　作成）

要衝の位置を確立している。平安末期より救仁院氏が治めていたが，南北朝期に楡井頼仲が「志布志城」に入っている。ここで言う「志布志城」は，最も早く築城されたとされる松尾城を指すと考えられる。

延文２年(1357)頼仲は志布志城と，拠城である大崎胡麻崎城を北朝方に攻略され，自刃した。その後をうけ南朝方の島津氏久の養子分である，新納実久が志布志に入った。

これに対して，北朝方の日向守護畠山直顕が志布志内城に入り，松尾城の新納実久を攻めたが，島津氏久の救援にあい，結果的に氏久が志布志内城を占拠した。これにより，志布志は奥州島津氏の領有するところとなった。異説はあるが，氏久が内城に入ったのは貞治４年(1365)頃と推定されている。

長禄２年(1458)以降，日向南部で伊東氏等の合戦が相次ぎ，志布志城は前線の拠点として利用されている。天文５年(1536)，志布志城の新納氏は，櫛間城(宮崎県串間市)にいた豊州島津家島津忠朝に攻められ，同７年(1538)には，島津忠朝・北郷忠相・肝付兼続に三方より攻められ，降伏している。その後は，島津忠朝が志布志城に入っている。

永禄元年(1558)以降には肝付氏が毎年の様に志布志を攻め，同５年(1562)，肝付兼続が攻め落とし，志布志に入った。その肝付氏も天正４年(1576)には伊東氏に敗れ勢力を失い，同５年(1577)より志布志城は島津氏が領有するところとなり，志布志地頭が置かれた。

その後，江戸期になり幕府より一国一城令が出されたことにより，廃城となっている。

3　内城跡の規模と構成

内城の規模は，南北約600ｍ，東西約300ｍである。北東から南西に延びた細長い丘陵の先端部に立地し，北東部のみが台地に繋がっている。この部分に深い堀切を設け，台地と山城を切り離している。

山城は丘陵を横断する４つの空堀と，これに直角に交わり丘陵長軸を平行して貫通する長い２つの空堀で区切られる。空堀で区切られた曲輪群は大きく３つの部分に分けられ，本丸，中野久尾，大野久尾と称されている。南北朝期には本丸を中心とした部分のみであり，その後の戦乱を経て中野久尾と大野久尾が拡張されたと考えられている。

本丸は南西の先端部分にあり，台地からは４本の空堀で隔てられている。本丸は約５ｍの段差を持つ２段の曲輪から成る。上段には西側と北側に大きな土塁があり，南東に虎口がある。土塁の北端には三宝荒神を祀った祠が存在し，幅広の土塁上には隅櫓の存在が想定される。

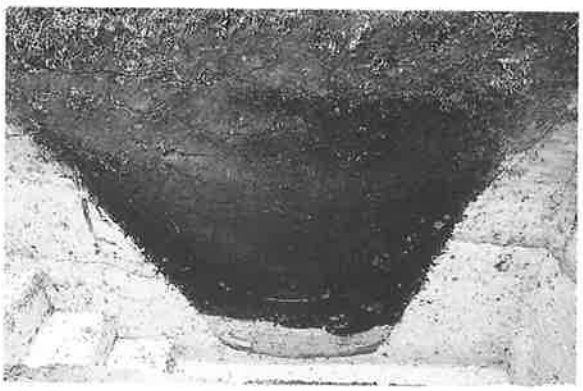
4　調査の概要

平成15年度の調査は，幅２ｍのトレンチを基準とする確認調査として実施している。内城の本丸を中心とする調査であったが，これに先立ち志布志城４城の全体構成を把握する手がかりとして，高城(南・北曲輪)，新城，松尾城の二ノ丸，三ノ丸のそれぞれの地点にもトレンチを設定して調査を実施した。

1)　高城跡

高城跡北曲輪の調査地点では，Ｔ字状の空堀の存在が想定されていた。調査の結果，シラスを削り込んだ堀が確認された。堀底は硬化し，通路として使用されたことをうかがわせる。また，埋土中にも硬化面が確認され，ある程度埋まった段階においても，通路として利用された可能性が示された。

南曲輪については，最も高い位置にある曲輪面を調査したが，近現代の耕作をうけた可能性が強く，陶磁器片をはじめとした遺物を確認するにとどまった。しかしながら，平成14年度に実施された調査によって，大きな空堀を隔てて新城と面する曲輪の西側に存在する土塁が，シラスを利用した盛土塁であることが確認されている。



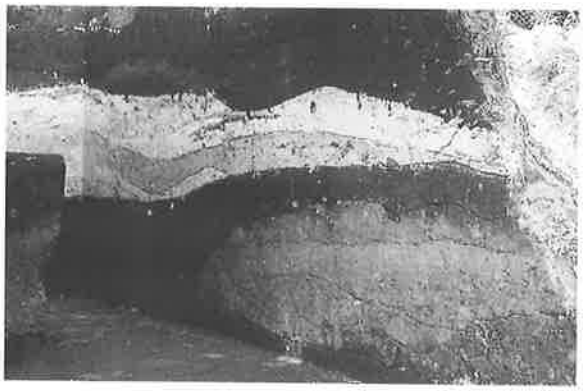
高城跡北曲輪　堀断面

2）新城跡

新城跡は現在，志布志中学校の校庭となっている。今回の調査では武道館付近に残存する土塁とテニスコート裏の土塁を調査した。

武道館付近の土塁はシラスを利用した盛土塁であり，台地から新城を区分する堀や谷に面している。土塁中からは中国製の白磁をはじめとする，陶磁器や土師器が確認された。

テニスコート裏の土塁についても盛土塁であることが確認され，土塁付近からは15～16世紀代と見られる陶磁器片が確認されている。



新城跡　土塁断面

3）松尾城跡

松尾城跡では，二ノ丸，三ノ丸の曲輪面を調査した。二ノ丸の北西部にある土塁は，切土塁であることが確認されたが，曲輪面からは柱穴等の明確な遺構は検出されなかった。出土遺物は青磁片が比較的多く，白磁や土師器も確認された。その時代は，おおむね15～16世紀代におさまるようである。

三ノ丸の調査においても，曲輪面からは明確な遺構は確認されなかったが，二ノ丸同様に15～16世紀代の陶磁器を中心とする遺物が確認された。小破片が多いものの青磁や染付が多数確認された。また，両調査地点から，少数ではあるが鉄製品，銅製品と考えられる金属片も確認されている。

4）内城跡

本丸を中心として，現在も調査を継続中である。本丸上段の南東部で建物跡が確認された。北東方向に約1間半の間隔で3基が並び，北西方向に約1間の間隔で，同様に1列を検出している。柱跡には，平たい大きな石が配されているものと，柱穴に石が入るものとが存在する。これら以外にも，周辺より柱穴と思われる遺構が確認される可能性がある。

周辺からは，15～16世紀代とみられる磁器片のほか，土師器，金属製品，古銭，鉄滓などが確認されている。

内城跡　建物跡

5　おわりに

内城跡については，現在も調査を継続中であり，今後も本丸を中心として調査を進めていく。また，松尾城跡・高城跡・新城跡についても，今回のトレンチ調査を補強し，より大きな成果を得るために，追加のトレンチ調査を実施する計画である。

調査中のため，概略のみの報告となったが，中世の志布志の姿を明らかにするため，皆様のご指導ご教示等をいただければ幸いである。

（おおくぼ　よしあき）

◆◆第21回見学会・例会報告◆◆

下　鶴　　弘

◎見学会

まだ梅雨の明け切らぬ，７月６日（日）午前９時過ぎ，会員約40名が野田町中央公民館に集合した。受付および日程説明後，早速，野田町教育委員会の橋元邦和氏と三木靖会長に亀井山城・新城・袈城を案内して頂いた。

亀井山城は，JR鹿児島本線野田郷駅から南へ約１㎞の丘陵上にある。西側へ１㎞ほど行くと阿久根境である。この城の主体部の範囲は，野田町上名字城内を中心に南北540ｍ，東西350ｍあり，県下でも有数の規模を誇っている。

周辺には莫祢城・出水城・木牟礼城などの本城があるが，保存状態などを考慮すれば，当城が北薩地域を代表する本城であると，三木会長はその歴史的価値を強調されている。

私たちは，三木会長が作成した縄張図を手がかりに城の東から入り，曲輪１・２や空堀を歩いて回ったが，なかなか全体像は掴めずにみな苦労していた。

ここで，亀井山城の変遷について，当日資料から以下に引用する。「当城は守護が拠った木牟礼城を擁護し，島津氏の領国経営に協力した城郭であったが，15世紀に出水が薩州家島津氏の領地になると，その属城となった。現在確認できる縄張りは16世紀後半のもので」あり，長期間にわたり使用された経緯を知ることができる。

さて，２時間ほどかけて，現地見学を終えた私たちは，北東の大手口から脱出した。前日までの雨のためとブッシュがひどく風通しが悪いため，城内は大変蒸し暑く，会員の多くは疲労困憊していたようだ。

しかしながら，先頭に立って，精力的に解説される三木会長から「城郭談話会の活動は斯くあるべし」との強い信念を会員一同深く感じ取った次第である。

見学会の最後は，お昼を過ぎたが，JR線をこえた高台にある袈城を案内していただいた。全体の様子は不明であったが，主体部の残りは良好で土塁に囲まれた方形館の印象を得た。時代は戦国時代よりひとつ古いのではないだろうか。今後の発掘調査が楽しみである。

◎例　会

午後の例会には，野田町の方々も集まり，参加者は約60名ほどであった。最初に三木会長による「薩摩国亀井山城」について，講演をしていただき，野田町の橋元氏にも見学会の補足説明を願った。司会は上田耕・橋口亘会員。

三木会長の発表要旨は，以下のとおりである。「亀井山城は，島津氏発祥の地にふさわしく，主体部は標高65ｍを最高所とする広さ15万㎡あり，土塁囲みの曲輪１・２を核に，四方を空堀で区分された12の曲輪を配し，その周囲を土居で囲み，字野首・新城・雪手ヶ迫・小葛川などを含む，50万㎡に及ぶ巨大な山城であった。」

休憩を挟んだ後，北薩地域の城郭研究の現状報告として，下記の順に発表をお願いした。

・堂込秀人会員「中世山城の近世遺物」
　藩では重要な中世山城については，江戸時代においても管理され続けたことを絵図を使って説明した。
・岩崎新輔氏「出水市松尾城と城山」
　発掘調査の成果をスライドを用いて紹介した。
・河北篤司氏「阿久根市の城跡調査」
　検出された竪穴建物址を紹介した。

最後に，熊本県内の城郭調査の近況を鶴嶋俊彦，宮崎県を白岩修，鹿児島県を堂込・上田耕会員が行って無事例会を終了した。

城郭研究

留守氏館跡の調査

重久淳一

1　はじめに

鹿児島県姶良郡隼人町に大隅正八幡宮社家であった留守氏の館跡がある。留守氏は，「貞治２(1363)年，留守左衛門入道景信が石清水善法寺より下向した」といわれ，姓は紀朝臣。現在18代目の当主が館跡の一角に居住している。これまで，隼人町教育委員会等によって，４次に亘る調査が行われている。ここでは，その調査で得られた成果を紹介する。

2　歴史的環境

遺跡は，隼人町神宮六丁目字辻1726－４外に所在する。鹿児島神宮（大隅正八幡宮）の参道が東西方向に真っ直ぐ延びており，神宮から東約600mには辻の角と呼ばれる交差点がある。本遺跡はその交差点の南東に位置する。交差点の北西には，現在宮内小学校となっている弥勒院跡があり，参道を挟んでその南側には桑幡氏館跡が立地する。宮内小学校には明治２年の廃仏毀釈で消滅するまで，ここに鹿児島神宮の別当寺である弥勒院があった。平安時代に遡る。弥勒院跡では平成６～８年度の３次に亘る発掘調査で，中国製の青磁・白磁，タイの黒褐釉壺，ベトナムの焼締陶器，

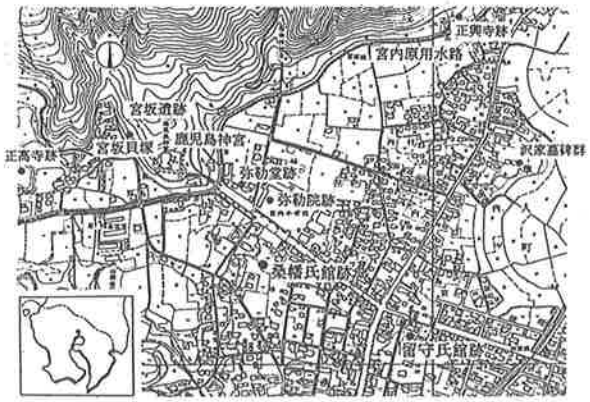


図１　周辺の遺跡

国内で極めて出土例の少ない元代の飛青磁，大量のカワラケ小皿などが出土している。この弥勒院の南にある桑幡氏館跡は，鹿児島神宮の四社家であった桑幡氏の累代の館があった場所である。北側には現在でも土塁の高まりを残す。平成12・13年度に調査された桑幡氏館跡からは，館跡を取り囲む薬研堀，そして大量の海外からの陶磁器が弥勒院跡と同じように出土している。また，タイ・ベトナムの陶器も発見されている。他には，12世紀後半の楠葉型瓦器坏が出土しており，中央との結びつきが強いことを示している。

四社家は，桑幡氏・留守氏・最勝寺氏・沢氏で，沢氏の子孫のみ町内では絶えている。四社家のうちでは，桑幡氏が最も神宮に近い位置を占め，留守氏館跡の北側200ｍには最勝寺氏の敷地がある。また，さらに北約300ｍには沢家墓碑群があり，現在，45基の板碑と延応元(1239)年の石塔，嘉禎３(1237)年の自然石塔婆が残っており，町の指定史跡となっている。

本遺跡周辺は，中世に栄華を極めた鹿児島神宮を取りまくように，四社家の館跡・寺院跡(弥勒院・弥勒堂・正興寺・正高寺・正国寺)があり，長く政治的・文化的・宗教的中心地として，「求心力をもつ空間」であった。また，発掘調査で出土した数多くの貿易陶磁器，さらに鹿児島神宮に伝世している品々は，海外との活発な交流を物語っている。いわば「貿易陶磁の終着点」と呼べる場所であった。

3　調査の概要

集合住宅建設工事に伴って実施された平成12年度の第１・２次調査では(トレンチ１～

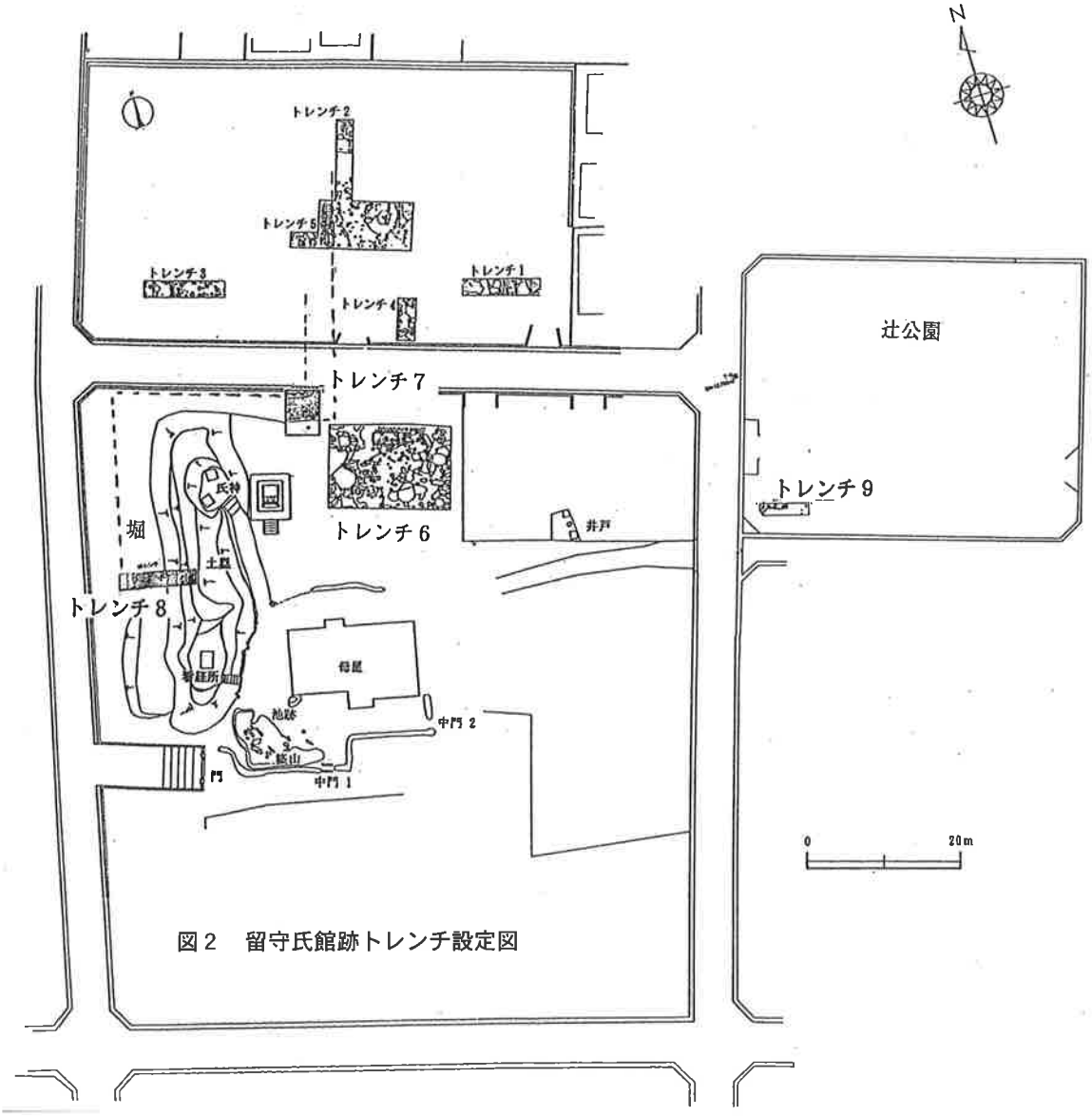


図２　留守氏館跡トレンチ設定図

５），多数のピット及び堀が検出され，やはり，土師器・国内外の陶磁器，高麗青磁，タイ黒褐釉壺などが出土している。トレンチ５の堀は，深さ３ｍを測り，底が平坦の箱堀であった。社務所等建設に伴って実施された平成14年度の第３次調査のトレンチ７でも堀跡が確認された。幅３ｍ，深さ2.5ｍ。その中から多量の土師器が出土した。他には，国内外の陶磁器などがみられた。第４次調査は，保存整備を目的に，平成15年９～10月に実施された。トレンチ８では，幅約６ｍ，深さ４ｍの堀が検出され，高さ３ｍの土塁は盛土及び土を突き固めた版築工法がみられた。版築の中には土師器の小破片が多量に出土し，意図的に混入，補強していたことが判明している（図３）。

昭和24年の屋敷の配置図によると（図４），周囲は堀と竹林に囲まれており，約１町歩の面積を有すると記されている。館の西側には，今なお，南北方向に走る土塁状の高まりが残っている。その規模は下底部幅約11ｍ，高さ約2.8ｍ，長さ約40ｍ。頂上部に，氏神・看経所などの祠がある。現存する土塁や検出された堀の位置からみて，北西がクランク状に屈曲する平面形を呈し，堀と土塁に囲まれたほぼ一町四方の館であることが明らかとなった。

以上のように，桑幡氏館跡と同様，中世には土塁と堀をめぐらし，庭園等を築き，舶載品を入手していたことが看取される。また，

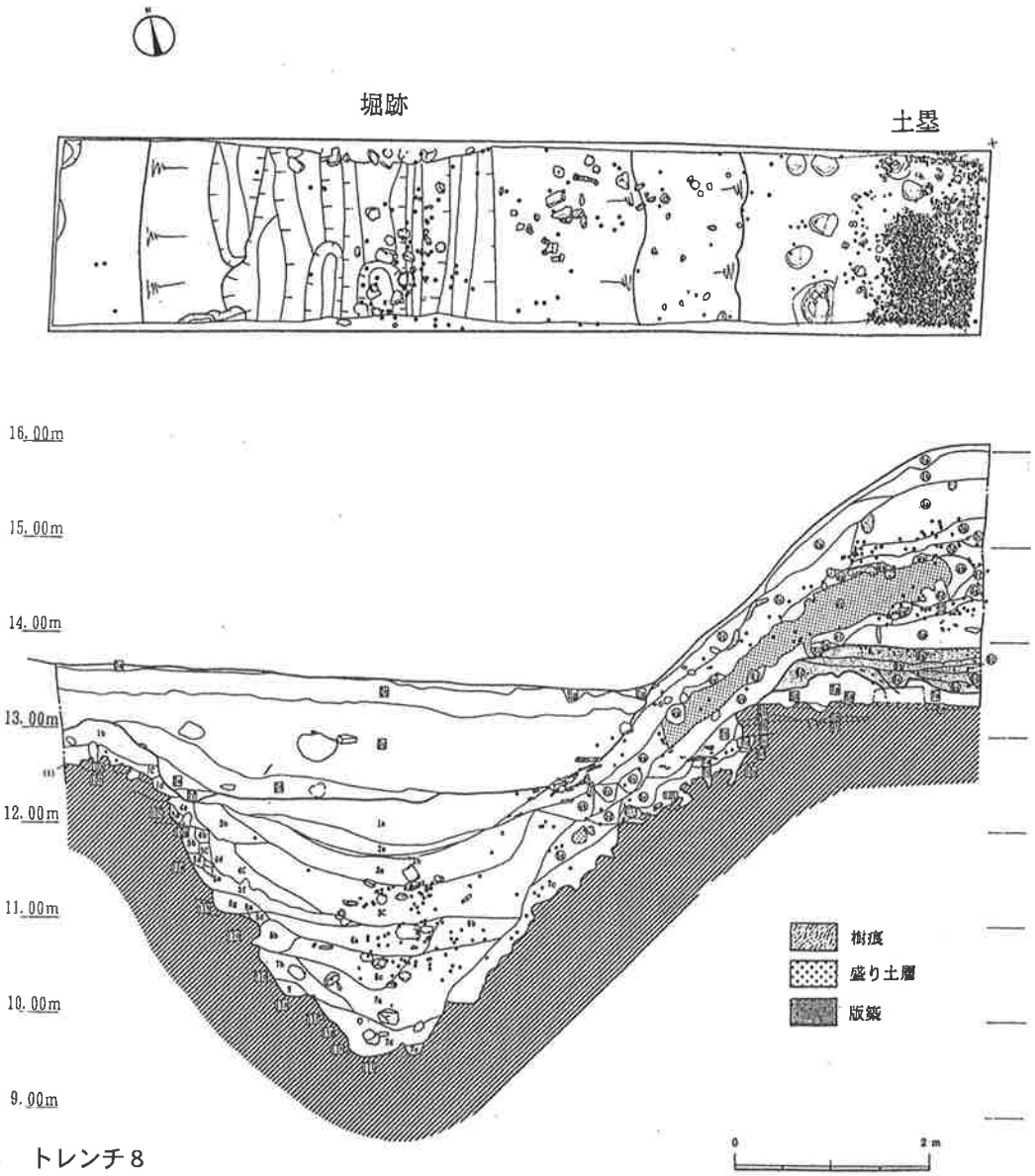


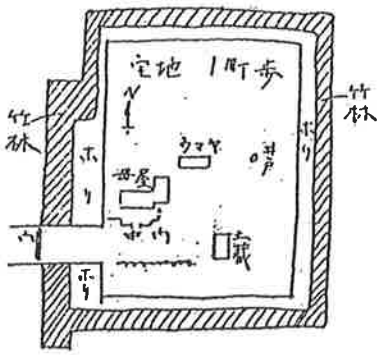
図3　トレンチ8

館の形状に特徴があることが判明した。鬼門といわれる北東ではなく，北西がクランク状をなすなど興味深い。

4　館跡の構造

現在，全国各地で中世の城館が調査されるようになり，その実態が少しずつ分かってきた。室町・戦国期には，いくつかの共通する館内の空間構造が指摘されている。「一町四方の四角い舘，大きな庭園をもつことが，最大の特徴で，その景観は『洛中洛外図屏風』の管領邸と類似した規模や空間構造をもち，それらをモデルとした規範から全国各地に同様の館や屋敷が作られたと考えられている」。その中では，序列的地位を確認するための様々な儀式，「室町儀礼」が行われていた（小野 1997）。館の中は，大きくハレ（非日常）とケ（日常）の場に分かれ，ハレは主殿・広場の儀式空間の表と会所・庭園を主とする連歌などの遊芸空間の奥に二分され，ケは当主の日常空間の常御殿など裏方機能の空間である。居館のもつ属性としては，区画，土塁，堀，礼門・脇門，主殿，会所，広場，庭園（池），井戸，工房，職人の住居などがある。これらを，桑幡・留守氏館跡でみると，桑幡氏館跡では，堀・土塁・池状遺構・井戸跡が確認され，留守氏館跡では堀，土塁，池の跡，井戸などがある。建物の構造は不明だが，主要なものは備えられている。留守氏館跡には二つの中門

図4　昭和24年の見取り図



があり，「身分階級によって區別されて居」たこと（櫟山1949）などからみて，礼門と脇門の関係を近代まで保持していたことを窺わせる。規格性についてみると（千田2000），

(A)　一辺200m前後のものでは，武田氏館跡，大内氏館跡，大友氏館跡，美濃守護所革手城，土佐守護所田村城などが知られており，「一国から複数の国を分国としてもった大名の居城，主殿と会所が分立し，広場と庭園を伴なった室町武家儀礼に則った空間構成」，

(B)　一辺100m前後のものでは，朝倉氏館跡があり，「一国からいくつかの郡を治めた大名の居城，ほぼ(A)と同様の空間構成。」，

(C)　一辺50m前後のものは村落領主の居城で，「主要建物は雁行型などの特別な平面構成はとらず，いくつかの機能を集約した建物を使用し，庭園を欠くことも多い」に分類されている。

留守氏館跡の近世～近代の建物は，宝暦6年建造とされる母屋に主殿にあたるイチノオモテを内包することから，主殿として分立はしてない(C)の要素をもつ。しかし，庭園が現存することや，規模は(B)に近い。近世以前は分立した(B)の構造を有していた可能性は十分ある。

このような館を造ることができた背景には，正八幡宮を通して，平安から中世前期には中央との結びつき，中世後期からは島津氏との結びつきを強めたことにある。平氏と正八幡宮との関係について，日隈正守氏は「平氏は国衙の有力な在庁官人である建部氏を被官化し，一宮である大隅正八幡宮と密接な関係をもっていた」とし，それを示すのが「長門本平家物語」の説話で，平清盛と第53代桑幡清道が親しく交わっていることが平氏と大隅正八幡宮との親密な関係を示すもので，平氏は国衙機構をとおして大隅国に勢力を延ばしてきたとする（日隈1999）。この逸話に係わるものが畿内系の瓦器であり，摂関家との結びつきを指摘されている遺物群であろう。

5　宮内地区中世宗教都市の特徴

以上のように，桑幡氏館跡と同様，留守氏館跡でも遺構が密集し，古代～近世までのものが見つかっている。それぞれには堀状の溝が検出され，現存する土塁状の高まりとともに，1町近い方形館であったことが考えられ，極めて防御性の高い居館としての諸要素を備えていたことが分かった。中世には土塁と堀をめぐらし，庭園等を築き，外国の品々を入手していたことが読みとれる。その規模からみて，国人クラスの居館といえよう。これら海外の陶磁器は，藤原成経・平康頼が流罪された際のルート（『長門本平家物語』）である鳩脇八幡崎（現在の破戸脇－隼人町野久美田清水海岸付近）などの湊を通して入り込んだ可能性が高い。慶長7（1602）年には，富隈之湊（現浜之市港）が登場しており，琉球渡海の朱印状もみられることから，錦江湾奥部には良好な港が展開していたことが窺われる。

両遺跡の位置する宮内地区は，社家の館などの分布からみて，神社・寺院を中心に複数の道によって街区割りがなされている可能性があり，宗教都市とでも呼べようか。

極度の緊張関係にある戦国時代や幕藩体制を生き抜いてきたこの都市の特徴は，「不変性」である。権力の移動によって城館の場所も構造も変化しやすい政治権力の城館とは異なり，宗教都市としての継続性がある。戦国期の一時期に，留守氏などが20数年この地を離れることはあっても，またその場所に戻り，

第76代目の桑幡氏が今でも神官職であるように，同じ職業に就き，その状態が近世，いや現在にまで続いているのである。

参考文献

櫟山 昭 1949『鹿児島地方の民家』南日本建築文化会
小野正敏 1997『戦国城下町の考古学』講談社
重久淳一 2001「鹿児島神宮社家屋敷跡の調査」『南九州の城郭』№17 南九州城郭談話会
千田嘉博 2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
隼人町教育委員会・隼人町遺跡調査会 2001『留守氏館跡』
隼人町教育委員会 2003『桑幡氏館跡－第3次調査－』
日隈正守 1999「律令国家の変質と中世社会の成立」『鹿児島県の歴史』県史46 山川出版社

第22回例会案内

鹿児島国際大学生涯学習センターと共催で下記の例会を実施します。

日　時	平成16年1月31日（土） 13:00～16:30
集合場所	鹿児島県市町村自治会館 （鹿児島県庁前）
交通案内	ＪＲ西鹿児島駅から車で10分 （鹿児島市鴨池新町7番4号）

会　順

第Ⅰ部　講演会

テーマ「鹿児島の埋もれた歴史遺産に光を」

・講師 三木　靖　会長
「鹿児島の歴史と文化を考える」

・講師 服部英雄教授（九州大学）
「鹿児島の文化的景観を考える」

第Ⅱ部　例　会

・鶴嶋俊彦氏 「相良領国の城と地名」
・大窪祥晃氏 「志布志城跡の調査概要」
・若山浩章氏 「近世の村から見上げた城」

◆◆新刊紹介◆◆

書籍・機関誌等

・**『首里城』** 歴史街道スペシャル 名城を歩く 14
ＰＨＰ研究所　誕生特別定価　540円

【新入会員】　（12月20日現在）

小村　美義　　新地浩一郎

シンポジウムの案内

「志布志城跡シンポジウム2004　浮かび上がる志布志の過去・現在・未来」～歴史の街づくり推進事業における山城整備の意義と役割～

コーディネーター：原口　泉

シンポジスト：三木　靖・揚村　固・東條正博・永山又男・末永雅雄

会　場：志布志町文化会館
鹿児島県曽於郡志布志町志布志2238番地

日　程：平成16年1月25日（日）12：30～16:50

問合先：志布志町教育委員会 TEL0994-72-1111

編　集　後　記

◆第21号をお届けします。今号には志布志城跡の調査報告を頂きました。感謝申し上げます。志布志町では，町をあげて歴史的遺産の積極的な整備・活用に取り組んでおり，その一環として，ご案内のようにシンポジウムが開催される予定です。会員の皆様方の積極的な参加・御協力をお願い致します。

◆次号の会報発行は，５月上旬の予定です。原稿は下記まで。　（Ｓhige）

重久淳一 〒899-5106 姶良郡隼人町内山田1138-5

南九州の城郭　第21号

発行所　鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
ミュージアム知覧内 上田耕 気付
南九州城郭談話会
（振替口座 02040－6－7850）

発行者　三　木　　靖
編集者　重　久　淳　一
印刷所　㈱ト ラ イ 社
入会金500円　年会費2,000円